

# 進路指導とキャリア教育の関係に関する研究

— 小学生の生活実態調査の結果をもとに —

小 谷 正 登

## 1. 問題と目的

現代社会において、経済・産業構造の変化や雇用形態の多様化、またそれによる生活環境の変化などを背景として、就学期にある児童生徒の進路に関する環境は激しく変化している。そして、生き方や価値観が多様化し、子どもたちはその選択肢の多さゆえに、進路選択・決定に困難さを覚えている。このことは、「フリーター」の増加や「NEET」<sup>1)</sup>の出現、継続して高水準にある早期離職率<sup>2)</sup>などの現象に現れている。このような中、従来の進路指導に加え、文部科学省は「キャリア教育」を推進している。これは、初等中等教育と高等教育の接続を想定するとともに、学校教育と社会、すなわち将来の職業生活との接続も視野に入れたものである。なお、「キャリア教育」という言葉を文部科学省が初めて用いたのは1999年である<sup>3)</sup>。その後、2004年に「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議の報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」が公表され、2008年7月に閣議決定された教育振興基本計画では、小学校段階からのキャリア教育、特に中学校を中心とした職場体験活動や普通科高等学校での取組を推進することが盛り込まれた。これを受け、2008・2009年度に改訂された小学校・中学校・高等学校学習指導要領では、キャリア教育の一層の推進が求められている。

そこで本論文では、従来から学校教育の重要な柱の一つであった進路指導と今後幅広く展開されるキャリア教育の関連を明確にし、その目的と内容について考察する。そして現在、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが求められているキャリア教育の在り方について、小学生対象の生活実態調査の結果をもとに検討する。

## 2. 進路指導とキャリア教育

### (1) 進路指導の定義

第二次大戦後の高度経済成長期では、日本企業の経営の三種の神器と呼ばれる独自の経営方式（年功序列、長期安定雇用・終身雇用制度、企業別組合）のもと学歴・学校歴が重要視される中、卒業後の進学・就職に焦点をあて入学試験や就職試験の合格を目指した指導・支援に

終始する実践が中学校・高等学校で見られた。このような実践は「出口指導」とも呼ばれ、現在でも多くの中学校・高等学校でみることができる進路指導であるが、このような受験指導は本来の進路指導の姿ではないと考えられる。以下では本来の進路指導とは、どのような教育活動であるのかを検討する。進路指導は、昭和30年代前半までは「職業指導」と呼ばれ、「学校における職業指導は、個人資料、職業・学校情報、啓発的経験および相談を通じて、生徒みずからが将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を助長するように、教師が教育の一環として、組織的、継続的に援助する過程である。」<sup>4)</sup>と定義されている。その後、「進路指導」という用語が職業指導の定義をほぼ引き継ぐ形で用いられるようになり、就職を希望する生徒以外も対象とする教育活動であることが示されるようになった。このような中、職業的発達を促す教育機能であり、援助活動である進路指導は、以下の6つの活動で実践されることとなる<sup>5)</sup>。

- ① 個人資料に基づいて生徒理解を深める活動と生徒に正しい自己理解を得させる活動
- ② 生徒に進路に関する情報を得させる活動
- ③ 生徒に啓発的経験をさせる活動
- ④ 生徒に進路に関する相談の機会を与える活動
- ⑤ 就職や進学等に関する指導・援助の活動
- ⑥ 卒業生の追指導に関する活動

以上から、進路指導は進路選択の決定が間近になった時期になってからの指導・援助だけではなく、入学から卒業までにとどまらず、卒業後の追指導までも含めた計画的・組織的な教育活動と定義できる。そして、従来の進路指導の実践が前述したように「出口指導」と指摘されるようになったのは、前述の6つの活動における「⑤」に焦点が絞られすぎてきたためであると考えられる。

このような中、進路指導の実践に対して「中学校における進路指導が、高等学校への進学率が高まる中で、長年、業者テストの偏差値などに過度に依存したものとなっている。高等学校では、学校生活への適応や現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力の育成に関して、ガイダンスの機能の充実を図ることや地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、就業体験の機会の確保に配慮することが求められる中、卒業までに就職に

至らなかった者が一定数生まれている状況が続いている」との厳しい指摘がなされるようになってきた<sup>6)</sup>。

## (2) 新しい進路指導としてのキャリア教育

以上のように中学校・高等学校で実践されてきた進路指導の課題を受け、1999年の中央教育審議会答申において最初に文部科学省で登場した「キャリア教育」という言葉は、キャリア教育に関する定義の若干の変化を伴いながら、今日に至っている。以下では、2011年1月31日に出された中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」<sup>7)</sup>およびその基礎となった中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）」<sup>8)</sup>の内容をもとに、その定義およびキャリア教育で育成が目指される四つの能力について述べていく。

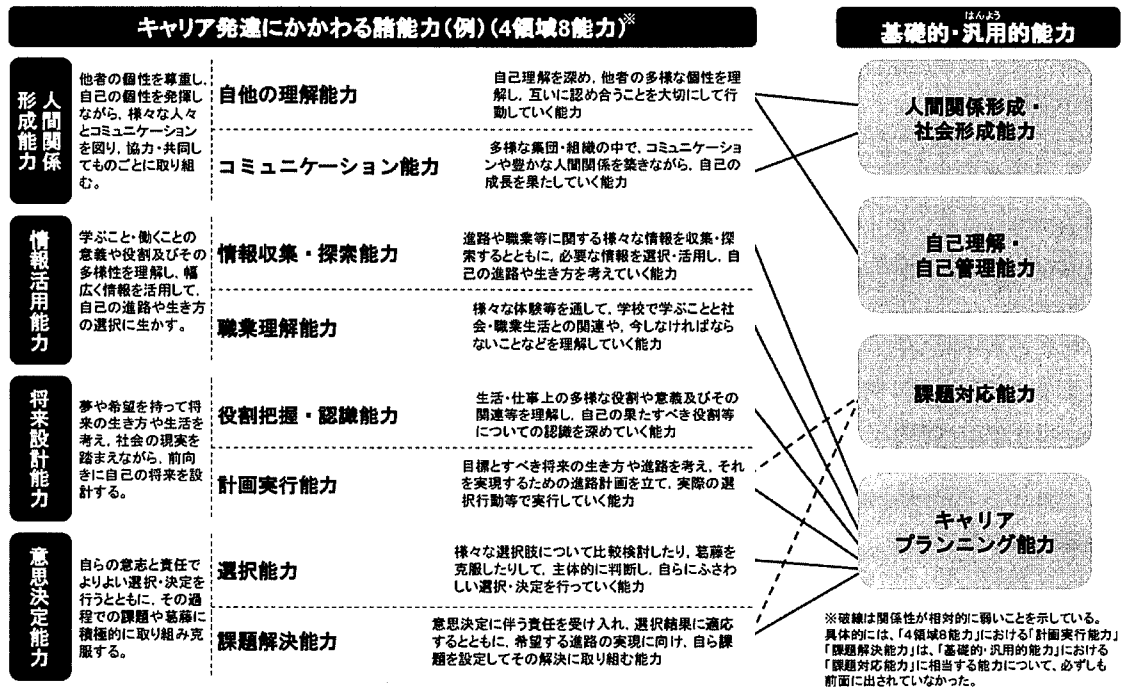
まず、キャリア教育について、「キャリア」を「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」とし、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義している。そして、キャリア教育は、「キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高

等教育に至るまで体系的に進めることが必要である。」(同答申)とするとともに、様々な教育活動を通じ、後述する「基礎的・汎用的能力」を中心に育成することをその基本的方向性としている。

次に、職業教育については「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」と定義し、「職業教育の意義を再評価し、実践的な職業教育を充実させること」を基本的方向性においている。

なお、キャリア教育および職業教育で育成すべき力を「基礎的・汎用的能力」とし、その内容として四つの領域(①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力)をあげている(図1)。これらの能力を育成するために、学校が家庭、地域・社会、企業などと連携し、それぞれの役割を發揮しながら、一体となった取組が求められている。

そして、これらの諸能力の中で、「キャリア発達にかかわる諸能力(4領域8能力)」としてあげられている情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの多くの能力と関連を持つものがキャリアプランニング能力である(図1)。さらに、「夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する力」と定義できる将来設計能力はその中核と考えることができる。また、中学校・高等学校



\*「4領域8能力」の出典は、国立教育政策研究所生涯指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」(平成14年11月)

図1 「キャリア発達にかかわる諸能力(例)」と「基礎的・汎用的能力」対応関係

出典：文部科学省(2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について—中央教育審議会答申一、文部科学時報第1623号、152

の教育活動に限定される従来の進路指導とは異なり、キャリア教育が幼児期から実施することが求められている背景には、同教育の在り方が学校教育のみならず子どもの生活全体の諸相と少なからず関連していることが考えられる。

### 3. 小学生の将来設計能力と生活の諸側面の関連

そこで以下では、小学生（以降、児童と表記）を対象とした生活実態調査の結果から、将来設計能力として今後の生き方や生活を考えることにつながると推測できる将来の「夢の有無」の状態と児童の生活および心身の諸側面の関連を分析・考察し、キャリア教育が学校教育のみならず、社会全体で取り組むべき教育であることの意義について検討する。

#### (1) 方法

##### 調査方法・時期・対象者

A市教育委員会との共同で調査協力が得られた同市内の公立小学校12校において、児童、保護者および教師対象の3種類の質問紙調査を行った。調査時期は2008年11月であった。児童および保護者対象質問紙は学校を通じて保護者に配布し、回答は保護者による厳封の上、担任教師を通じて回収した。教師対象質問紙も同様の方法を取り、全ての調査において人権保護および個人情報保護に配慮した。本論文の調査・分析対象者である小学生1～6年生の基本的属性は、表1の通りである。

##### 調査内容

児童対象調査に用いた質問紙項目の内容は、以下の通りである。

- ①フェイスシート：学年・性別を尋ねた。
- ②児童本人の生活実態について：睡眠、食事、放課後の過ごし方、学校生活、現在の心身の状態、人間関係などに関する47項目について尋ねた。その他、自尊感情を測定し、現在の悩みについて自由記述を用いて尋ねた。

#### (2) 結果と考察

##### 「夢の有無」と生活実態を示す項目との関連

「夢の有無」について尋ねた質問（Q33：「将来の夢がありますか。」）に対する「夢がある」、「夢はない」、「わからない」の回答の中で、「夢がある」（5,970名）を「夢有群」、「夢はない」（509名）と「わからない」（1,214名）を合わせて「夢無群」（計1,723名）として群分けを行った。そして、「夢の有無」と児童の生活実態を示す項目の関連を検討するため、夢の有無の状態（夢有群・夢無群）と生活実態項目のクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を実

施した。 $\chi^2$ 検定の結果は、表1に示す通りである。さらに、 $\chi^2$ 検定の結果から分布の偏りに有意差が確認されたものについて、「夢の有無」が児童の生活に及ぼす影響をより詳細に明らかにするために、ハバーマン（Haberma）法による残差分析をおこない、5%の標準正規偏差値1.96を基準にして、調整された残差の値（表中の太字）を比較する方法で残差分析を行った。なお、この残差分析の結果において、分析表のセル中に示された調整済残差の値（太字の値）が「+1.96」を超えていればこのセル中の割合が5%水準で有意に高く、「-1.96」を下回っていればそのセルの割合が5%水準で有意に低いとすることができる。

1～6年生全学年の児童の基本的属性との関係について、性別および学年とも有意な差があった。「夢の有無」と性別との関係では、夢有群の割合は男児で有意に低く（ $n=2,942$ , **-6.4**）、女児で有意に高かった（ $n=2,996$ , **6.4**）。反対に夢無群の割合は男児で有意に高く（ $n=998$ , **6.4**）、女児で有意に低かった（ $n=714$ , **-6.4**）。学年との関係では、夢有群の割合は1年生（ $n=909$ , **-2.5**）と6年生で有意に低く（ $n=834$ , **-4.9**）、4年生（ $n=1,049$ , **2.5**）と5年生（ $n=1,049$ , **2.8**）で有意に高かった。反対に夢無群の割合は1年生（ $n=304$ , **2.5**）と6年生で有意に高く（ $n=323$ , **4.9**）、4年生（ $n=258$ , **-2.5**）と5年生（ $n=252$ , **-2.8**）で有意に低かった。

以上から、男児より女児の方が夢を持っていること、学年が進むにつれて夢を持つようになるが、中学校入学前の6年生ではその傾向が低下していくことが示された。

①睡眠：平日の平均起床時刻との関係では、夢有群の割合は「6時以前」の群で有意に高く（ $n=739$ , **3.7**）、「7時30分以降」の群で有意に低かった（ $n=604$ , **-3.4**）。次に、平日の平均就寝時刻との関係では、夢有群の割合は午後「10時以前」の群で有意に高く、「11時30分以降」の群で有意に低かった。反対に、夢無群の割合は午後「10時以前」の群で有意に低く、「11時30分以降」の群で有意に高かった（表2）。次に、目覚めの状態との関係では、夢有群の割合は「目覚めがよい」群で有意に高く（ $n=1,719$ , **5.5**）、「目覚めが悪い」群で有意に低かった（ $n=520$ , **-5.2**）。昼間の眠気との関係では、夢有群の割合は「よく・時々ある」群で有意に低く（ $n=2,542$ , **-3.3**）、「あまり・全くない」群で有意に高かった（ $n=3,364$ , **3.3**）。さらに、夜の寝つきの悪さとの関係では、夢有群の割合は「よく・時々ある」群で有意に低く（ $n=549$ , **-3.5**）、「全くない」群で有意に高かった（ $n=5,014$ , **3.9**）。

岡部（2009）は「午後10時頃までに就寝し、午前6時30分頃までに起床する生活」を小学生の「早寝早起きの

表1 夢の有無（夢有群・夢無群）と小学校全学年（1～6年生）の生活実態との関係

調査・分析対象者			
児童全体(n=7,775)性別 男子(3,990・51.3%), 女子(3,786・48.1%), 無回答(49・0.6%)			
学年 1年生(1,243・16.0%), 2年生(1,348・17.3%), 3年生(1,371・17.6%), 4年生(1,312・16.9%), 5年生(1,312・16.9%), 6年生(1,165・15.0%), 無回答(24・0.3%)			
(全学年)	夢有群	夢無群	全体
質問項目のカテゴリー・内容	(5,970名)	(1,723名)	(7,693=n)
<b>基本的属性</b>			
性別 (男子・女子)			$\chi^2(1) = 40.725^{***}$
学年 (1年生～6年生)			$\chi^2(5) = 39.980^{***}$
<b>睡眠</b>			
平日の起床時間 (6時以前/6時30分～7時頃/7時30分以降)			$\chi^2(2) = 22.662^{***}$
平日の就寝時間 (10時以前/10時30分～11時頃/11時30分以降)			$\chi^2(2) = 33.671^{***}$
目覚めの状態 (よい/時々よい/時々悪い/悪い)			$\chi^2(3) = 56.614^{***}$
昼間の眠気 (よくある・時々ある/あまりない・全くない)			$\chi^2(1) = 10.968^{**}$
夜の寝つきの悪さ (よく・時々ある/あまりない/全くない)			$\chi^2(2) = 16.111^{***}$
<b>食事</b>			
朝食の欠食登校 (よく・時々する/あまり/全くしない)			$\chi^2(2) = 23.498^{***}$
夕食の孤食 (よく・時々する/あまり/全くしない)			$\chi^2(2) = 21.076^{***}$
家族そろっての夕食 (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 15.825^{***}$
夕食時のTV視聴 (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = .497$ n. s.
食事の楽しみ (よく感じる/時々感じる/あまり・全く感じない)			$\chi^2(2) = 126.450^{***}$
食前の挨拶 (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 78.630^{***}$
炭酸飲料の摂取 (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 5.864^\dagger$
スナック菓子の摂取 (よく/時々する・あまり・全くしない)			$\chi^2(1) = .069$ n. s.
既製の弁当の摂取 (よく・時々する/あまりしない/全くしない)			$\chi^2(2) = 6.110^*$
インスタントラーメンなどの摂取 (よく・時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(1) = 2.258$ n. s.
野菜の摂取 (よく/時々する/あまり・全くない)			$\chi^2(2) = 52.978^{***}$
排便回数 (毎日/2～3日に1回/4日～1週間に1回)			$\chi^2(2) = 28.241^{***}$
<b>放課後の過ごし方 (友人関係・遊びなど)</b>			
友達との会話・遊び (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 41.778^{***}$
友達の家での遊び (よく・時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(1) = 8.185^{**}$
自分の家での遊び (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 2.049$ n. s.
屋外での遊び (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 24.173^{***}$
家での手伝い (よくする/時々する/あまり・全くしない)			$\chi^2(2) = 33.013^{***}$
平均自宅学習時間 (ほとんどしない/15分/30分/45分/それ以上)			$\chi^2(3) = 76.986^{***}$
TV・ビデオなどの視聴時間 (ほとんど見ない～1時間30分以下/2時間以上)			$\chi^2(1) = 1.774$ n. s.
ゲームソフトなどの使用時間 (ほとんどしない～30分/30分～1時間/1～2時間/2時間以上)			$\chi^2(3) = 23.031^{***}$
週当たりの塾・習い事の日数 (通っていない/1～2日/3～4日/5～6日・毎日/その他)			$\chi^2(4) = 49.455^{***}$
<b>学校生活</b>			
学校に対する親和感情 (好き/嫌い・どちらでもない)			$\chi^2(1) = 83.744^{***}$
授業の理解度 (よく・わかる/時々わからない・わからないことが多い)			$\chi^2(1) = 21.943^{***}$
登校拒否的感情 (よく・時々感じる/感じない)			$\chi^2(1) = 18.397^{***}$
<b>情緒・感情・身体的側面</b>			
日常の肯定的感情 (毎日が楽しい/楽しくない・わからない)			$\chi^2(1) = 113.802^{***}$
疲労感の有無 (よくある/時々ある/あまり・全くない)			$\chi^2(2) = 1.483$ n. s.
焦燥感の有無 (よくある/時々ある/あまり・全くない)			$\chi^2(2) = 6.886^*$
虚無感の有無 (よく・時々ある/あまりない/全くない)			$\chi^2(2) = 53.510^{***}$
倦怠感の有無 (よく・時々ある/あまりない/全くない)			$\chi^2(1) = 22.429^{***}$
攻撃的感情の有無 (よく・時々ある/あまりない/全くない)			$\chi^2(2) = 13.899^{**}$
攻撃的行動の有無 (よく・時々ある/あまり・全くない)			$\chi^2(1) = 4.988^*$
腹痛・頭痛などの有無 (よく・時々ある/あまり・全くない)			$\chi^2(1) = 1.219$ n. s.
今一番ほしい時間 (ねる～ゲームソフトで遊ぶ/その他)			$\chi^2(10) = 121.982^{***}$
最近の気持ち (ポジティブ/ネガティブな感情)			$\chi^2(1) = 56.364^{***}$
自尊感情の3分類 (高群/中群/低群)			$\chi^2(2) = 72.705^{***}$
死生観 (生き返ると思う/わからない・思わない)			$\chi^2(1) = 10.325^{**}$
<b>家族・他者との関係</b>			
家族との会話の有無 (学校での出来事) (よく/時々話す/あまり・全く話さない)			$\chi^2(2) = 137.098^{***}$
家族の傾聴的態度 (真剣に聞いてくれる/聞いてくれない)			$\chi^2(1) = 39.643^{***}$
相談相手の有無 (いる/いない)			$\chi^2(1) = 63.926^{***}$

\*\*\* p < .001 \*\* p < .01 \* p < .05 † p < .10

生活」としている。以上から、いわゆる朝型の生活リズムと「夢の有無」の間に関連のあることが明らかとなった。また、朝型の生活リズムとの関係が推測される目覚めの状態および昼間の眠気、寝つきの悪さが表す入眠の状態との関係から、睡眠の様々な状態と「夢の有無」の間に関連があることが示唆された。睡眠の状態は、家族関係および家族、特に養育者の生活リズムの影響を受けていると考えられるところから、「夢の有無」が家族関係と関連があることが推測できる。

②食事：朝食の欠食登校との関係では、夢有群の割合は「よく・時々する」群で有意に低く (n=2,664, -3.9)、「全くしない」群で有意に高かった (n=1,801, 4.7)。次に夕食の孤食との関係では、夢有群の割合は「よく・時々する」群で有意に低く、「全くしない」群で有意に高かった。反対に、夢無群の割合は「よく・時々する」群で有意に高く、「全くしない」群で有意に低かった (表3)。家族そろっての夕食との関係では、夢有群の割合は「よくする」群で有意に高く、「あまり・全くしない」群で有意に低かった。反対に、夢無群の割合は「よくする」群で有意に低く、「あまり・全くしない」群

で有意に高かった (表4)。食事の楽しさとの関係では、夢有群の割合は「よく感じる」群 (n=3,342, 10.9) で、食前の挨拶との関係では「よくする」群で有意に高く (n=4,687, 8.6)、食事の楽しさ (n=999, -8.1)、食前の挨拶とも「あまり・全くない」群で有意に低かった (n=487, -6.7)。

体調の状態に大きな影響を与えると考えられる食事の内容については、以下の5項目において分析を行った。既製の弁当の摂食との関係では、夢有群の割合は「よく・時々する」群で有意に低かった (n=1,268, -2.3)。反対に夢無群の割合は有意に高かった (n=407, 2.3)。野菜の摂食との関係では、夢有群の割合は「よくする」群で有意に高く (n=4,011, 7.1)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった (n=591, -4.7)。一方、炭酸飲料の摂取との関係では有意な傾向が見られたが、スナック菓子の摂取およびインスタントラーメンなどの摂食との関係では、有意な差はなかった。続いて、食事による体調の状態を示す排便回数との関係では、夢有群の割合は「毎日」の群で有意に高く (n=3,096, 3.8)、「4日～1週間に1回」群で有意に低かった (n=654,

表2 夢の有無 (夢有群・夢無群)×平日の就寝時刻

	「10時以前」群	「10時30分～11時頃」群	「11時30分以降」群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	4,021(52.9%)	1,294(17.0%)	590(7.8%)	5,905(77.7%)	33.671***
調整済み残差	4.2	-0.5	-5.6		
夢無群	1,062(14.0%)	382(5.0%)	251(3.3%)	1,695(22.3%)	
調整済み残差	-4.2	0.5	5.6		
合計	5,063(66.9%)	1,676(22.1%)	841(11.1%)	7,600(100.0%)	

\*\*\*p < .001

表3 夢の有無 (夢有群・夢無群)×夕食の孤食

	「よく・時々する」群	「あまりしない」群	「全くしない」群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	583(7.7%)	638(8.4%)	4,680(61.6%)	5,901(77.7%)	21.076***
調整済み残差	-2.6	-3.4	4.6		
夢無群	205(2.7%)	234(3.1%)	1,256(16.5%)	1,695(22.3%)	
調整済み残差	2.6	-3.4	-4.6		
合計	788(10.4%)	872(11.5%)	5,936(78.1%)	7,596(100.0%)	

\*\*\*p < .001

表4 夢の有無 (夢有群・夢無群)×家族そろっての夕食

	「よくする」群	「時々する」群	「あまり・全くしない」群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	1,763(23.3%)	2,045(27.0%)	2,076(27.4%)	5,884(77.6%)	15.825***
調整済み残差	2.4	1.7	-3.9		
夢無群	457(6.0%)	552(7.3%)	687(9.1%)	1,696(22.4%)	
調整済み残差	-2.4	-1.7	3.9		
合計	2,220(29.3%)	2,597(34.3%)	2,763(36.5%)	7,580(100.0%)	

\*\*\*p < .001

－4.9)。

以上から、「夢の有無」と朝食の欠食を始めとする食事の状態、夕食の孤食および家族そろっての夕食など食事の形態、加えて食事の内容との間に関連があることが明らかになり、食生活に関する環境と「夢の有無」の間に一定の関係のあることが示唆された。なお、夕食の孤食および家族そろっての夕食など食事の形態も、睡眠の状態と同様に家族関係の影響を受けていることが考えられるため、「夢の有無」が家族関係と関連しているが推測できる。

③放課後の過ごし方(友人関係・遊びなど)：友人関係・遊びについては、以下の3項目をあげることができる。友達との会話・遊びとの関係では、夢有群の割合は「よくする」群で有意に高く、「あまり・全くしない」群で有意に低かった。反対に、夢無群の割合は「よくする」群で有意に低く、「あまり・全くしない」群で有意に高かった(表5)。友達の家での遊びとの関係では、夢有群の割合は「よく・時々する」群で有意に高く(n=3,876, 2.9)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった(n=2,055, -2.9)。次に、「屋外での遊び」との関係では、夢有群の割合は「よくする」群で有意に低く(n=339, -4.9)、「あまり・全くしない」群で有意に高かった(n=2,488, 3.0)。

一方、家での手伝いと関係では、夢有群の割合は「よくする」群で有意に高く(n=2,856, 5.4)、「あまり・全くしない」群で有意に低かった(n=1,366, -4.5)。

放課後の過ごし方についても、以下の3項目をあげることができる。夢有群の割合は、平均自宅学習時間との関係では「ほとんどしない」群で(n=1,681, 6.8)、ゲー

ムソフトなどの使用時間との関係では「ほとんどしない～30分」の群で有意に高かった(n=3,138, 3.5)。「適当な塾・習い事の日数」との関係では、夢有群の割合は「通っていない」群で有意に低く(n=673, -6.2)、「5～6日・毎日」群で有意に高かった(n=1,119, 3.0)。

以上から、「夢の有無」が放課後に自宅と友人宅を歩き来して交流を図るなどの親しい友人関係、および家事の手伝いと関連があること、ゲームに費やす時間および自宅ではなく塾や習い事で学習を進める時間と「夢の有無」に関連があることが明らかになった。親しい友人関係の経験や家事を手伝うこと、および学習に時間を費やすことが人間関係を形成する力や「夢の有無」と関連していると考えられる。

④学校生活：学校に対する親和感情との関係では、夢有群の割合は「学校が好き」群で有意に高く(n=4,060, 9.2)、「嫌い・どちらでもない」群で有意に低かった(n=1,896, -9.2)。授業の理解度との関係では、夢有群の割合は「よくわかる・わかる」群で有意に高く、「時々わからない・わからないことが多い」群で有意に低かった。反対に、夢無群の割合は「よくわかる・わかる」群で有意に低く、「時々わからない・わからないことが多い」群で有意に高かった(表6)。登校拒否的感情との関係では、夢有群の割合は「よく・時々感じる」群で有意に低く(n=3,328, -4.3)、「感じない」群で有意に高かった(n=2,540, 4.3)。

以上から、「夢の有無」と学校に対する親和感情、授業の理解度さらには登校拒否的感情に関連があり、「夢の有無」と小学校での学校生活の間に双方向的な関係が形

表5 夢の有無(夢有群・夢無群)×友達との会話・遊び

	「よくする」群	「時々する」群	「あまり・全くしない」群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	3,908(51.0%)	1,144(14.9%)	890(11.6%)	5,942(77.6%)	41.778***
調整済み残差	6.4	-4.0	-4.1		
夢無群	983(12.8%)	405(5.3%)	328(4.3%)	1,716(22.4%)	
調整済み残差	-6.4	4.0	4.1		
合計	4,891(63.9%)	1,549(20.2%)	1,218(15.9%)	7,658(100.0%)	

\*\*\*p < .001

表6 夢の有無(夢有群・夢無群)×授業の理解度

	「よくわかる・わかる」群	「時々わからない・わからないことが多い」群	合計	$\chi^2$ (df=1)
夢有群	4,118(53.8%)	1,820(23.8%)	5,938(77.6%)	21.943***
調整済み残差	4.7	-4.7		
夢無群	1,084(14.2%)	627(8.2%)	1,711(22.4%)	
調整済み残差	-4.7	4.7		
合計	5,202(68.0%)	2,447(32.0%)	7,649(100.0%)	

\*\*\*p < .001

成されていることが示唆された。

⑤情緒・感情・身体的側面：児童の情緒・感情・身体的側面については、「疲労感の有無」と「腹痛・頭痛などの有無」の2項目を除く、10項目で有意差が確認された。「日常の肯定的感情」との関係では、夢有群の割合は「毎日が楽しい」群で有意に高く (n=4,348, 10.7)、「楽しくない・わからない」群で有意に低かった (n=1,562, -10.7)。

日常の否定的感情を示す3項目、焦燥感・虚無感・倦怠感それぞれの有無との関係では、夢有群の割合は焦燥感では「よくある」群 (n=1,600, -2.3) で、虚無感 (n=1,648, -5.2) および倦怠感 (n=2,507, -4.7) では「よく・時々ある」群で有意に低く、反対に夢無群の割合は全ての項目で有意に高かった。

次に、キャリア教育を進める上で課題となる可能性が考えられる攻撃的感情との関係では、夢有群の割合は「よく・時々ある」群で有意に低く (n=2,130, -3.5)、「全くない」群で有意に高かった (n=1,794, 2.8)。そして、様々な問題行動と関連が深い攻撃的行動の有無との関係では、夢有群の割合は「よく・時々ある」群で有意に低く (n=2,310, -2.2)、「あまり・全くない」群で有意に高かった (n=3,597, 2.2)。また、最近の気持ちとの関係<sup>9)</sup>では、夢有群の割合は「ポジティブな感情」の群で有意に高く (n=4,483, 7.5)、「ネガティブな感情」の群で有意に低かった (n=1,397, -7.5)。死生観との関係では、夢有群の割合は「(死者が) 生き返ると思う」群で有意に高く (n=1,043, 3.2)、「わからない・思わない」群で有意に低かった (n=4,853, -3.2)。さらに「今一番ほしい時間」との関係では、夢有群の割合は、「勉強する時間」(366, 3.5)、「家族と過ごす時間」(1,054, 5.2) および「運動する時間」(651, 6.5) の各群で有意に高く、「寝る時間」(n=507, -3.9)、「遊ぶ時間」(n=1,726, -2.3)、「テレビを視聴する時間」(n=165, -3.3) および「ゲームソフトで遊ぶ時間」(n=789, -4.5) の各群で有意に低かった。

岩崎 (1999) は、小学生を対象とした調査結果から、自尊感情と進路意識の関連性を見出し、明確な進路意識を育成する上での自尊感情の重要性を述べている。また長谷川 (1999) は、中学生を対象とした調査結果をもと

に、自尊感情の高まりが進路決定に関する自己効力の向上につながることを示唆している。前述したように、キャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」の一つであるキャリアプランニング能力は、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの多くの能力と関連を持つ。そして、その中核が「夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する力」と定義できる将来設計能力であった。以上から、「夢の有無」と自尊感情の間に関連があると仮定できるため、以下ではその関連性を明らかにする。自尊感情の測定にあたっては、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版尺度 (星野, 1970) を著者もその一員となって対象者が回答しやすいような文言に修正し、調査を実施した。質問項目は10項目で構成されており、逆転項目が5項目含まれている。評定は4段階評定を用い、「とても思う」を4点、「思う」を3点、「思わない」を2点、「全然思わない」を1点 (逆転項目ではこの反対) にした。10項目による尺度得点の理論的範囲は、10~40点となる。全体の平均値は26.33点、中央値は26.00点であり、この中央値を基準に29~40点を自尊感情高群、25~28点を自尊感情中群、10~24点を自尊感情低群として群分けを行った。構成比率はそれぞれ33.9%、32.3%、33.8%となった。

「夢の有無」と自尊感情の関係では、夢有群の割合は自尊感情高群で有意に高く、睡眠低群で有意に低かった。反対に夢無群の割合は自尊感情高群で有意に低く、睡眠低群で有意に高かった (表7)。さらに、夢有群・夢無群の2群において、自尊感情得点平均値の比較の検定 (T検定) を実施した。その結果、夢有群は夢無群より自尊感情得点平均値が有意に高かった (表8)。

以上から、将来の「夢の有無」と「日常の肯定的感情」の間に関連があること、焦燥感・虚無感・倦怠感、攻撃的感情、および攻撃的行動の有無などのキャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」にはマイナスの要因となりえる日常の感情と行動、一方プラスの要因と考えられる自尊感情ポジティブな感情とも関連があることが明らかになった。「今一番ほしい時間」との関係なども踏まえると、睡眠、食事、友人関係や遊びなどの生活環境が整うことによって、心身が安定する

表7 夢の有無 (夢有群・夢無群) × 自尊感情3群

	高群	中群	低群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	2,006(28.2%)	1,782(25.0%)	1,753(24.6%)	5,541(77.8%)	72.705***
調整済み残差	7.6	-0.3	-7.2		
夢無群	411(5.8%)	516(7.2%)	655(9.2%)	1,582(22.2%)	
調整済み残差	-7.6	0.3	7.2		
合計	2,417(33.9%)	2,298(32.3%)	2,408(33.8%)	7,123(100.0%)	

\*\*\*p < .001

とともに否定的な情緒・感情・身体的側面が収束していくこと、そして前向きな気持ちや行動につながる自尊感情が高まることが推測できる。そして、岩崎ら(2012)も、自尊感情の高さと「将来の夢の有無」の関連性を述べているところから、「夢の有無」と自尊感情の高さの間に相互関係が形成されていることが示唆される。以上は、キャリア教育および職業教育を進める上で、児童の自尊感情を育成することの重要性を示すものと考えられる。

⑥家族・他者との関係：児童の心理的側面に大きな影響を与えていると考えられる家族との会話の有無との関係では、夢有群の割合は「よく話す」群で有意に高く、「あまり・全く話さない」群で有意に低かった。反対に、夢無群の割合は「よく話す」群で有意に低く、「あまり・全く話さない」群で有意に高かった(表9)。家族の傾聴的態度との関係では、夢有群の割合は「真剣に聞いてくれる」群で有意に高く(n=4,719, 6.3)、「聞いてくれない」群で有意に低かった(n=1,163, -6.3)。次に、困った時の家族以外も含めた相談相手の有無との関係では、夢有群の割合は「いる」群で有意に高く(n=5,310, 8.0)、「いない」群で有意に低かった(n=607, -8.0)。

以上から、「夢の有無」と家族との対話の有無、家族の傾聴的態度および相談相手の有無との間に関連のあることが明らかになった。この結果は、前述した「家族からの情緒的支持や自律性を尊重した養育態度が自尊感情、さらに進路決定に関する自己効力の高まりにつながる」との先行研究(長谷川, 1999)の結果を支持するものである。一方、全学年の11.8%にあたる903名が「相談相手がいない」と答えている実態は、本人の対人関係および家族関係だけではなく、キャリア教育および職業教育を推進する上での大きな課題と考えられる。

#### 4. 総合的考察

本論文では、従来から学校教育の重要な柱の一つであった進路指導と今後幅広く展開されるキャリア教育の関連を明確にし、その目的と内容について検討した。その結果、中学校・高等学校で実践されてきた従来の進路指導の意義と課題、さらに現在の雇用状況の実態を受けてキャリア教育の必要性が生まれたこと、同教育が中学校・高等学校における進路指導を包含しながら、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが求められていることを確認した。また、キャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」が四つの領域(①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力)で構成され、これらの能力を育成するために、学校が家庭・地域・社会・企業などと連携する取組が求められていることも示された。そこで筆者は、これらの諸能力の中で、「キャリア発達にかかわる諸能力(4領域8能力)」としてあげられている情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの多くの能力と関連を持つキャリアプランニング能力の中核と考えられる将来設計能力(「夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する力」)に注目した。そして、従来の進路指導の対象ではないがキャリア教育の重要な対象とされる小学生を対象とした生活実態調査の結果から、将来設計能力の一要因として将来の生き方や生活を考えることにつながる「夢の有無」の状態と児童の生活および心身の諸側面の関連を分析・考察した。その結果、睡眠の状態では、朝型の生活リズム、目覚めの状態などの睡眠の様々な状態と「夢の有無」の間に関連があることが示唆され、「夢の有無」が家族関係などとも関連があることが推測された。

表8 「夢の有無」別の自尊感情得点の比較

要因	グループ(n)	平均値(SD)	t値
夢の有無	有群(5,541)	26.61(5.87)	8.90***
	無群(1,582)	25.33(4.96)	

\*\*\*p < .001

表9 夢の有無(夢有群・夢無群)×家族との会話の有無

	「よく話す」群	「時々話す」群	「あまり・全く話さない」群	合計	$\chi^2$ (df=2)
夢有群	2,825(37.1%)	2,085(27.4%)	1,000(13.1%)	5,910(77.7%)	137.098***
調整済み残差	10.3	-2.8	-9.6		
夢無群	574(7.5%)	663(8.7%)	464(6.1%)	1,701(22.3%)	
調整済み残差	-10.3	2.8	9.6		
合計	3,999(63.9%)	2,748(36.1%)	1,464(19.2%)	7,611(100.0%)	

\*\*\*p < .001



次に食事の状態では、食生活に関する環境と夢の有無の間に一定の関係があることが示唆された。また、夕食の孤食および家族そろっての夕食などの食事の形態も、睡眠の状態と同様に家族関係の影響を受けていることが考えられるところから、食事の状態においても「夢の有無」が家族関係と関連しているが推測された。

放課後の過ごし方の状態では、親しい友人関係の経験や家事を手伝うこと、および学習に時間を費やすことが児童の前向きな気持ちや「夢の有無」と関連していると考えられた。次に、学校生活の状態においては、「夢の有無」が授業の理解度などの小学校における学校生活と互いに影響をあたえていることが示唆された。

さらに情緒・感情・身体的側面の状態では、「将来の夢の有無」と焦燥感や攻撃的行動の有無などのキャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」にはマイナスの要因となりえる日常の感情と行動、一方プラスの要因と考えられる日常の肯定的感情、自尊感情とも関連のあることが明らかになった。キャリア教育および職業教育を進める上で、日常の肯定的感情や自尊感情を育成することの重要性が示された。加えて、「夢の有無」と家族との対話の有無、家族の傾聴的態度および相談相手の有無との間に関連のあることが明らかになり、睡眠・食事および放課後の過ごし方の状態と同様に、家族関係や友人関係が将来の「夢の有無」と関係していることが示された。

以上から、将来の「夢の有無」と生活の諸側面の好ましい状態との関連が明らかになった。そして、家庭において将来の夢、そして生き方について日頃から話し合うことが、良好な家族関係につながるとともにキャリア教育の基礎となる可能性を持っていることが示された。また、キャリア教育が子どもの生活の諸側面と関連しながら、家庭を含めた地域や社会で取り組むべき教育であることが、児童の生活実態調査の結果から示唆された。加えて、親しい友人関係の経験と「夢の有無」の関連性などから、学校生活全体を通して友人関係を育成することもキャリア教育につながることを推測でき、同教育が学校教育のみならず、社会全体で取り組むべき教育であることの意義が確認された。

## 5. 今後の課題

今回の分析においては、小学生の「夢の有無」と生活の諸側面の関連についてその全体像をつかむために1年生から6年生までを一括して分析したが、今後は学年を区切って分析することで、詳細に小学生におけるキャリア教育と生活実態の関連を明らかにしていく予定である。また本分析は、白石ら（2010）が実施した調査で得られたデータを許諾のもと使用し、小谷ら（2010）の睡

眠の質と児童の生活の諸側面の関連を検討した先行研究の知見を受け実施した。そのため、キャリア教育および職業教育で育成すべき「基礎的・汎用的能力」を明確に表す質問項目が設定できなかった。また、「夢の有無」と生活の諸側面の好ましい状態との関連が明らかになったが、夢があるということが原因となって生活の諸側面の好ましい状態が発生しているのか、あるいは、好ましい生活の諸側面が原因で夢をもつことができているのかという因果関係についても、本論文では明らかにすることができなかった。

そこで今後は、新たな質問項目を設定した質問紙調査を中学生・高校生をも対象として実施し、多変量解析法などを実施することによって構造分析を行い、各要因の関連性を詳細に検討する中で因果関係を明らかにしていくつもりである。

## 【注】

- 1) Not in Education, Employment or Training（就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない若者）の略で、元々はイギリスの労働政策において出てきた用語である。日本では、若年無業者のことをさし「15～34歳の非労働力人口のうち、通学、家事を行っていない者」をいう。厚生労働省（2014）「若者雇用関連データ」。  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/12.html>
- 2) 中学、高校、大学の卒業3年後の離職率は、それぞれ62.1%、39.2%、31.0%となっている（2010年3月卒業者）。厚生労働省（2014）「若者雇用関連データ」。  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/12.html>
- 3) 文部科学省中央教育審議会（1999）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」平成11年12月16日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/1309737.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309737.htm)
- 4) 文部省（1955）「職業指導の手引き—管理・運営編」。
- 5) 文部省（1994）「中学校・高等学校進路指導の手引—学級担任編—（三訂版）」日本進路指導協会
- 6) 文部科学省（2007）文部科学白書（平成18年度）。
- 7) 文部科学省中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」平成23年1月31日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm)
- 8) 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）」平成22年5月17日。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo10/sonota/1293955.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/sonota/1293955.htm)
- 9) 望月（2007）に基づき、ポジティブな感情として「しあわせ」・「楽しい」・「明るい」の3項目、ネガティブな感情として「さみしい」・「不安な」・「おこりっぽい」・「つらい」・「むかつく」・「びくびくする」・「暗い」・「心配な」・「何もかもがいやだ」の9項目計12項目をあげ、回答を求めた。

## 引用・参考文献

- 長谷川龍彦 (1999) 中学生の自尊感情と進路選択能力の関連. 進路指導研究, 19(1), 35-43
- 星野 命 (1970) 感情の心理と教育. 児童心理, 24, 1445-1477
- 岩崎久美子 (1999) 小学生の進路意識と学業成績に及ぼす心理的要因—原因帰属と自尊感情—. 進路指導研究, 19(1), 26-34
- 岩崎久志・小谷正登・来栖清美・藤村真理子・三宅靖子・加島ゆう子・木田重果・下村明子・白石大介 (2012) 小学校高学年における自尊感情と生活の諸側面との関係—生活実態に関する調査結果をもとに—. 日本学校心理学会年報, 5, 89-100
- 小谷正登・来栖清美・岩崎久志・藤村真理子・三宅靖子・加島ゆう子・木田重果・下村明子・白石大介 (2010) 生徒指導に生かす睡眠を中心とした生活臨床の可能性—小学生への生活実態調査をもとに—. 生徒指導学研究, 9, 35-44
- 望月 昭 (2007) 対人援助の心理学. 朝倉書店.
- 岡部悟志 (2009) 「早寝早起き朝ごはん」ができている子どもの特徴とその家庭環境. 放課後の生活時間調査報告書 (ベネッセコーポレーション), 58-70
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton University Press.
- 白石大介・岩崎久志・小谷正登・藤村真理子・来栖清美・三宅靖子・下村明子・加島ゆう子・木田重果・河西利枝 (2010) 「生活病理・生活臨床に関する臨床教育学的調査研究」研究報告書 (平成19~21年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究 課題番号19653102).

## 付記

本研究および本研究のもととなる調査は、平成20年度日本学術振興会科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 科研費番号19653102、研究代表者：白石大介）の助成を受け、執筆者のほか来栖清美（森ノ宮医療大学）、岩崎久志（流通科学大学）、木田重果（西宮市立浜甲子園中学校）、加島ゆう子（西宮市立夙川小学校）、三宅靖子（大成学院大学）、下村明子（梅花女子大学）、藤村真理子（伊丹市立伊丹特別支援学校）、河西利枝（明石市立貴崎小学校）、白石大介（武庫川女子大学名誉教授）の各氏を含めた共同研究として実施した。

## 謝辞

本調査にご協力いただいた A 市内の児童・保護者・教師および A 市教育委員会のみなさまに御礼を申し上げます。

(こたに まさと・関西学院大学教授)